



Title	[もう立派なギタリストです] : ギターレッスンにおける成員カテゴリー化
Author(s)	古川, 敏明
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 11-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85044
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「もう立派なギタリストです」：ギターレッスンにおける成員カテゴリー化

古川 敏明

1. 導入

教育と学習の会話分析研究として、本稿では音楽のレッスン、特にアコースティックギターのレッスンにおける講師と受講者のやりとりをデータとして、予備的な分析を提示する。相互行為中の教育と学習については、教室内会話に頻出する IRE/F 連鎖、教育・学習機会の創出、動機のような心的トピックの再特定化など、さまざまな着眼点があり得るが、本稿はギターレッスンという一種の教室内会話において、参加者たちが自らや他者をどのようなカテゴリーに帰属させるのかという問いを掲げ、制度的場面で可視化されるカテゴリーをめぐる社会的行為を記述する。

2. 先行研究

相互行為中の会話における成員カテゴリー化は、異文化コミュニケーション場面、養育者・子どもの会話、オンライン会話、ニュース番組など、さまざまな状況をデータとして分析されてきた (Greer, Brandt & Ogawa, 2013; Nguyen & Nguyen, 2017; Rintel, 2015; Stokoe & Attenborough, 2015; 山崎・佐竹・保坂, 1993)。相互行為の参加者たちは、会話の連鎖の中でカテゴリーとカテゴリーに付随する属性を資源として用いながら、意味の交渉を行い、間主観性を達成する。本稿では、教育と学習の場であるギターレッスン中のやりとりにおける成員カテゴリー化に着目する。

3. 方法

教育と学習のデータとして、同じ講師と受講者の1対1のギターレッスンをビデオカメラ1台で記録した。記録したのは、2017年12月から2018年3月にかけて撮影した30分のレッスン6回分(合計約3時間)である。本稿はカテゴリー化が観察された6回目のレッスンを対象とし、レッスン中のやりとりからの抜粋を示し、コレクション構築に向けた予備的分析を行う。

レッスンは通常、受講者が入室、挨拶、ギターや楽譜の準備、レッスン、受講者が退室という流れで進んでいく。本稿では受講者の入室後、レッスンが開始して5分ほど経過した時点のやりとりを分析する。講師と受講者は椅子に座って向かい合い、どちらもギターを持ち、目の前の譜面台にテキストを開いた状態で置いている(図1)。より正確には、講師は斜め右に、受講者は斜め左に譜面台を置いている。テキストのページには現在扱っている曲の譜面が掲載されている。



図1 講師(左)、受講者(右)

4. 分析

以下の抜粋は、前週と同じ曲を復習している場面である。参加者のAは講師、Bは受講者を表す。抜粋に先行するやりとりでは、まずAがBm7(ビーマイナーセブン、付録1)を鳴らしてから、Bに実演させていた。続いて、同じようにAがAm7(エーマイナーセブン、付録2)を鳴らしてから、Bに実演させていた。BがAm7とAm(エーマイナー)の類似点に言及すると、AがBの発話内容を肯定し(1行目)、間を挟んで(2行目)、(Am7の隣に掲載されている)Bm7を見るように述べている(3、5行目)。

抜粋1

1 A |>so so so so<
a |((頷き、テキストを見て、右手でテキストを指差す))
2 (.4)
3 A de tonari no mokkai
4 B bi:maina:|sebum
a |((テキストを見る))
5 A mite kudasai.
6 (.5)
7 B hai. ((メガネに触れ、咳))

Aの要請に対し、Bがテキスト上のコードを特定したことを知らせるとともに、Aによる説明を促している(7行目)。次の抜粋では、Aがコードに関する説明を開始する(8行目)。

抜粋2

8 A kore dakara ne ano
9 A |onnaji ko:do da to omotte kudasai.
a |((Bを見る))
10 B n:[:::]
11 A [bi:maina:] ((テキストを見る))
12 A sebum to e:maina: |sebum.
a |((Bを見る))
13 (.8)
14 B ho:..

Aは「これ」(ここまで話題になっている2つのコード)と述べてから、「おんなじ」コードだと見なすよう指導し、その後で、Bm7とAm7の2つのコードを改めて特定している(9行目)。Bは類似性を認めようとしている途中であることを示しており(10行目)、コードが特定された後には(11-12行目)、比較的長い間を挟んで(13行目)、2つのコードの類似性を新情報として受け止めたことを示す発話を行なっている(14行目)。この間、Aは2回視線をBに向け、Bの理解度をモニターしている(9、12行目)。しかし、次の抜粋でも、Bがコードの類似性を理解したことを示す応答は産出されず、長い間があり(15行目)、Aはギターネックから手を離して腿に置き、この後に演奏ではなく、説明が続くことを投射している。

抜粋3

15 | (1.7)
a |((左手がギターネックから腿へ))
16 A de kore ga onnaji ni mieta[ra:]
17 B [hhh]

18 A mo: [rippana: |gitarisuto desu.
a |((Bを見て、頷く))
19 B [o:
20 B |naruhodo.
b |((頷き3回))
21 A hhh
22 B ho:n. ((上着の内ポケットからペンを取り出す))
23 A hhh ((テキストを見る))
24 B |onnaji ni mienai na.
a |((Bを見る))
25 B |[n:.
b |((テキストにまるを書き入れる))
26 A |hehehe
a |((テキストを見る))

長い間した後 (15 行目)、A は再びターンをとって説明を開始する (16 行目)。2つのコードが「おなじ」に見えたらという仮定の状況を提示し終わるところで、B が笑い (17 行目)、設定された仮定を説明が必要な事柄として扱っている。A は発話を継続し、仮定された状況、つまり、2つのコードを同一と認識できることと結びついたカテゴリー (立派なギタリスト) を産出している (18 行目)。B は短く感嘆を表示する応答をして、A が産出するカテゴリーを先取りして理解したことを主張しつつも、産出されるカテゴリーとは距離をとっているように聞くことができる (19 行目)。カテゴリーが産出された直後は、B が「なるほど」という発話と同時に、頷きを繰り返し、A の説明に納得したことを示している (20 行目)。A は笑い (21 行目)、B の発話 (と頷き) を説明の必要な事柄として扱っている。B は再び感嘆を表示する応答をして、A の説明を新情報として扱うとともに、上着の内ポケットからペンを取り出している (22 行目)。A は笑うことで、再び B の応答を説明が必要な事項として扱っている (23 行目)。

この後、B は自分には2つのコードが同じに見えないという属性を明かすことで、笑いや感嘆の発話をしたことに対する説明を行っており、A が産出した「立派なギタリスト」が自分には適応されないことを示している (24 行目)。さらに、B は考え中であることを示しながら、コードが掲載されているテキストの該当部分をまるで囲むことで、「受講者」としてふるまっている (25 行目)。この間、A は B の感嘆の発話に笑いで応じたり (23 行目)、視線を B に向けて理解度をモニターしたりしていたが (24 行目)、再度笑い、テキストに視線を移している (26 行目)。ここまで B の理解が不十分であることが可視化されており、次の抜粋では、A が姿勢を変え、新たな説明を開始することを投射している (27 行目)。

抜粋4

27 a ((組んでいた脚を元に戻し、右腕を上げる))
28 A dakara
29 A |e:maina:|seibun no
a |((人差し指を立てた右腕を正面に突き出す))
b |((内ポケットにペンを入れる))
30 A hidarigawa |no
a |((正面の空間で小さくまるを描く))
31 A |shiomaru mittsu (.)
a |((上から下へ、小さくまるを3つ描く))
32 A |koko ga
a |((右腕を上げる))
33 A |kuro de betto nutteru
a |((右腕を下、上、下、上、下と動かす))
34 A kanji ni

35 | (.2)
 a | ((Bを見る))
 36 B n:.
 37 (1.0)
 38 A |mite yareba
 a | ((テキストを見る))
 39 a ((Bを見る))
 40 (.2)
 41 B hu::n

Aは接続詞「だから」でコードの共通性の認識方法に関する補足説明を開始し(28行目)、テキストにあるAm7(付録2)の左側に縦に3つ並んでいるまるの代わりに、バレーコードであることを示す縦長の黒い印があるとみなせば、と仮定を提示している(29-34、38行目)。この補足説明は、抜粋2の10行目で最初に示された内容理解に関するトラブルについて、Aによる他者開始・他者修復が行われ、コードの見方について、熟達者の見方が指導されている場面といえる。

Aは視線をBに移して理解をモニターしているが(35行目)、Bは再び考え中であることを示しており(36行目)、長い間を挟んで(37行目)、Aは仮定の提示を終えるとともに、視線をテキストへ移す(38行目)。ここまで、Aは空間に複数のまるを描いてAm7を体現し、縦のベタ塗りを示すことでBm7を体現しており、2つのコードの間に共通性を見出す補助線を引くことによって、「立派なギタリスト」が実践する見方にBを招き入れようとしている(Nishizaka, 2020)。

Aは再びBを見るが(39行目)、Bは説明を受信したことを示しているが、理解が十分であるかは明示していない(41行目)。次の抜粋では、Aが新たな補足説明を開始し、ギターで実演も行うと、ようやくBが2つのコードの類似性を認識したことを可視化している。

抜粋5

42 | (1.1)
 a | ((視線がテキスト、正面へ移動。ギターネックをつかむ))
 43 A |kore ga
 a | ((ギターを鳴らす))
 44 a ((Bを見てから下を見る))
 45 A bi:|maina:sebun ga sonomama-
 b | ((Aを見る))
 46 a ((ギターを2回鳴らし、Bを見る))
 47 A [zureteku to
 48 B [|a::
 b | ((頷きながらテキストを見る))
 49 (.4)
 50 A ne.
 51 | (.3)
 a | ((テキストを見る))
 52 B n: [n: n:] a: a: a: a: naruhodo.
 53 A [| (daitai)]
 a | ((Bを見る))
 54 A [|so]
 a | ((テキストを見る。左手がギターネックから腿へ))
 55 B [hai] hai

Aはギターをつかみ(42行目)、新たな補足説明を開始すると同時にコードの実演を行なっている(43行目)。AがBの様子をモニターしながら(44行目)、説明を継続し(45行目)、さらに

コードの実演をしたところで (46 行目)、B が理解したことを示す、これまでよりも強い応答を産出している (48 行目)。より強い応答というのは、a (「あ」) とは異なり、a: (「あ::」あるいは「ああ」) が心的状態の変化を指標しつつも、全く知識がない状態から知識がある状態になったのではなく、事前知識が改訂されたという認知スタンスをとっているからである (Endo, 2018)。B は 1 度目のコード実演 (43 行目) の直後に A に視線を移し (45 行目)、2 回目の実演 (46 行目) が終わるまで A への視線を維持していた。(視線の対象をより正確に特定することは難しいが、おそらく、ギターフレットに置かれた A の指の配置を見ていると考えられる。)

短い間を挟んで (49 行目)、A は「ね」を産出することで、2 つのコードの見方だけでなく、聴き方に関しても共通理解を求めている (50 行目)。短い間の後 (51 行目)、B は繰り返しを伴う発話で、これまでで最も明示的に理解を可視化している (52、55 行目)。B の理解が明示されたので、A は左手をギターネックから腿へ移動させ、補足説明が一旦終結したことを示している (54 行目)。

5. 結論

本稿では、ギターレッスンをデータとして、講師 (A) と受講者 (B) が行う成員カテゴリー化を中心に分析した。レッスンでは、講師が 2 つのコード (Am7 と Bm7) の見方を話題とし、これらに共通点を見出せることが、「立派なギタリスト」というカテゴリーに付随する属性であるということを経験として利用したカテゴリー化が行われていた。ただし、このカテゴリー化は、講師が単独で行なったものではない。受講者は笑いや考え中であることを指標する発話などの応答をすることで、自らが「立派なギタリスト」というカテゴリーに属さないものとして振る舞っていた。つまり、講師と受講者は協働して、B が「受講者」であるという間主観性を達成していた。

本稿では、レッスンの一部を切り取り、一連の連鎖を分析対象としたが、同一のレッスンや異なるレッスンで繰り返し観察される共通の現象のコレクションを構築していくことが今後の課題である。また、コードの見方だけでなく、聴き方についての指導が起こることが音楽レッスンの特徴と考えられるので、この点もさらに分析を進めたい。

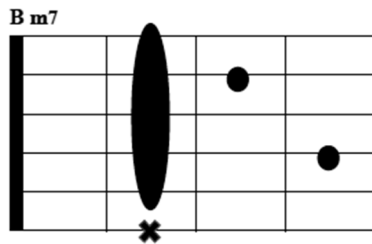
参考文献

- Endo, T. (2018). The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-166.
- Greer, T., Brandt, A., & Ogawa, Y. (2013). Identity in intercultural interaction: How categories do things. *The 2013 PanSIG Conference Proceedings*, 155-164.
- Nguyen, H. T. & Nguyen, M. T. (2017). “Am I a good boy?”: Explicit membership categorization in parent-child interaction. *Journal of Pragmatics*, 121, 25-39.
- Nishizaka, A. (2020). Appearance and action: The sequential organization of instructions in Japanese calligraphy lessons. *Research on Language and Social Interaction*, 53(3), 295-323.
- Rintel, S. (2015). Omnirelevance in technologised interaction: Couples coping with video calling distortions. In R. Fitzgerald & W. Housley (Eds.), *Advances in membership categorisation Analysis* (pp. 123-150). Sage.

Stokoe, E. & Attenborough, F. (2015). Prospective and retrospective categorisation: Category proffers and inferences in social interaction and rolling news media. In R. Fitzgerald & W. Housley (Eds.), *Advances in membership categorisation analysis* (pp. 5170). Los Angeles: Sage.

山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 (1993) 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力: <車いす使用者>のエスノメソドロジー的研究」 『社会学評論』 44 号, 30-44.

付録 1



付録 2

